山口大学教育学部研究論叢　第 71 巻　335 頁～ 344 頁　2022 年 1 月

中国語における舌打ち音について

－自然会話とインタビュー会話を対象として－

劉　伝霞 *1・有元　光彦 *2

A Study on Tongue-clicking in the Chinese Language
－ Comparison between Natural Conversation and Interview-style Conversation －

LIU Chuanxia*1, ARIMOTO Mitsuhiko*2

（Received September 24, 2021）

1．はじめに

劉・有元（出版予定），劉(2020a，2020b，2021a，2021b)においては，自然会話[1]における二連鎖感動詞類[2]に関する研究が行われている。そこでは，二連鎖感動詞類が現れている1ターンの発話には，発話の進行と並行に，真偽判断に関する一連の認知プロセスが流れていると提案されている。しかし，これらの研究では非常に限られた種類の感動詞類しか対象としていない。特に，舌打ち音に関しては，感動詞類と同様の機能を持つことが先行研究で主張されてはいるが，まだその研究は十分ではない（cf. 劉2021a:194-195）。そこで，本稿では，舌打ち音がどのような機能を持つか，感動詞類と同じかどうかについて記述していく。

中国語の自然会話では，感動詞類の発話の前後に，舌打ち音がしばしば見られる[3]。例えば，次のデータを見られたい[4]。

(1)
01©F07：但我**觉**得「人名1」**〔舌〕**，**嗯**，性格不**错**
（「人名1」〔舌〕，うん，性格がいいと思うよ）
02©F08：「人名1」？
（「人名1」?）

(1)の©F07の発話には，感動詞類の「**嗯**」（うん）の直前に舌打ち音が現れている。劉(2021c)では，中国語の自然会話に現れる舌打ち音がフィラーの1つとして，その発話時に次の発話内容を検索するという認知プロセスが流れていると提案されている。しかし，そこでは，「〔舌〕，**嗯**」（〔舌〕，うん）のような舌打ち音と感動詞類からなる発話にも，二連鎖感動詞類と同様に，真偽判断に関する一連の認知プロセスが流れているのかについては十分な議論が行われていない。また，筆者らの今までの研究では，自然会話を中心に考察していたが，データの種類が少ないという問題点があった。

そこで，本稿では，中国語において，自然会話とインタビュー会話といった種類の異なるデータを対象とし，それらに現れる舌打ち音を記述する。そして，舌打ち音と感動詞類の組み合わせに注目し，それらの発話時に二連鎖感動詞類と同様の認知プロセスが流れているのかを考察していく。

2．先行研究

本節では，舌打ち音に関する先行研究を見てみる。

まず，于(2007)，友定・于・定延(2008)では，文献に見られる使用例，インターネット上の使用例を用いて，

＊1　山口大学　東アジア研究科コラボ研究推進体特別研究員
＊2　山口大学　国際総合科学部

[1]「自然会話」とは，「実験的に設定されたもの」ではなく，「基本的におしゃべりの類，すなわち日常会話のことである」（cf. サックス・シェグロフ・ジェファソン2010:8, 12）。
[2]二連鎖感動詞類とは，2つの異なる形式の感動詞類が連続したものであり，自然会話における発話者の一連の心的な認知プロセスをモニターする標識の組み合わせである（cf. 劉2021a）。
[3]「舌打ち音」とは，「click（吸着音）　軟口蓋とその前の2箇所で閉鎖をつくり，内向的な気流によって算出される破裂音をいう」（cf.『最新英語学・言語学用語辞典』（中野弘三ほか監修，開拓社）2015:7）。
[4]本稿では，分析対象となる舌打ち音を「**〔舌〕**」で示す。また，中国語データの下に，丸括弧で日本語訳（筆者による）を付ける。データの表記については3.1節を参照されたい。

日本語母語話者と中国語母語話者の「舌打ち」の分布と用法に関する対照研究を行われている。これらの分析対象は書き言葉である。

一方，中国語の話し言葉に現れる舌打ち音を分析したものに，劉(2021c)がある。前述したが，ここでは，中国語母語話者による自然会話を対象とし，「嘖舌現象反映了發話者對接下來的發話內容進行檢索的認知過程」（舌打ち音の発話時に，発話者が次の発話内容を検索するという認知プロセスが流れている）という結論に至っている（cf. 劉2021c:62）。

また，森田(2015)では，「ストーリーテリング調査」，「地下鉄案内ロールプレイ調査」，「メディアにみられる舌打ち調査」から得られた舌打ち音のデータを用いて，日仏対照言語学的観点から分析している。ここでは，「仏語談話における舌打ちはフィラーに非常によく似たものであり、フィラーと同様に注意喚起機能があること、そしてその用法は情報処理または言語表現処理、境界設定、発見、発話権の取得・維持、感情表出であるということを明らかにした。また、これらは無意識に発せられ、聞き流されているということも明らかになった」（cf. 森田2015:172-173）と述べられている。また，森田(2019)では，音声学的・通時言語学的・地理的観点から，フランス語話し言葉における舌打ち音について分析されている。森田(2021)では，言語学的観点，コミュニケーションの観点から，フランス語母語話者の談話において，フィラーのように頻繁に現れる舌打ち音に焦点を当て，考察が行われている。

そして，萩原・池谷(2020)は，「A. 三者会話、B. 二者会話、C. タイドラマ」という三種類のデータを用いて，タイ人の舌打ち音を「認知行動系」と「感情表出系」の2種類に大別している。

以上より，中国語・日本語・フランス語・タイ語においては，舌打ち音の研究はいくつか見られる。しかし，話し言葉を対象とした研究はまだ十分ではなく，特に中国語に関しては，データの不足も含めて，分析が十分ではない。そのため，中国語の舌打ち音が，中国語母語話者の自然会話だけに現れるのか，それとも非自然会話にも共通して現れるのか，現時点では不明である。本稿における研究は，中国語の話し言葉である自然会話とインタビュー会話のデータを用いている点で，従来の研究を補ものである。

3. 研究対象・研究方法

3.1. 研究対象

本稿では，自然会話のデータ（以下，「データ❶」）とインタビュー会話のデータ（以下，「データ❷」）を併用し，中国語母語話者の舌打ち音に関する考察を進める。

まず，本稿で扱うデータ❶は，中国語母語話者の二者間の共通語での自然会話である。調査は中国語母語話者合計18名を対象に行い，2人ずつに分かれ，10本のデータを収集した。発話者は全員19歳～20代の学生同士で，親しい友人関係にある。また，発話者は調査当時全員，筆者の周辺にいた在日中国人留学生であり，日本語上級学習者である[5]。調査では，調査者（筆者）は同席せず，また会話内容や話題も指定していない。調査時間は，1組につき約30分である。調査におけるすべての発話は，iPhoneの「ボイスメモ」で録音した。

表1に「データ❶」の概要を挙げる。

表 1　「データ❶」の概要

データ番号	発話者記号	時間数
❶-01	ⒸF01-ⒸF02	0時28分20秒
❶-02	ⒸF03-ⒸF04	0時30分00秒
❶-03	ⒸF05-ⒸF06	0時26分52秒
❶-04	ⒸF07-ⒸF08	0時27分27秒
❶-05	ⒸF09-ⒸF10	0時30分04秒
❶-06	ⒸF11-ⒸF12	0時27分03秒
❶-07	ⒸM13-ⒸM14	0時30分00秒
❶-08	ⒸM14-ⒸF15	0時30分00秒
❶-09	ⒸM16-ⒸM17	0時28分00秒
❶-10	ⒸM17-ⒸF18	0時30分00秒

(*ⒸF :中国語母語話者 女性（Chinese Female）
ⒸM :中国語母語話者 男性（Chinese Male））

次に，本稿で扱うデータ❷は，中国の『巅锋』という番組から抽出したインタビューである。この番組は，インターネット上に公開されており，インタビューアーとインタビューイー（有名人を対象とする）一対一の形式で，40分ほどのインタビューである。データ❷の詳細は，表2に示す。

また，データの書き起こし記号については表3に示す[6]。

[5] 発話者の出身地はほとんどが中国の人口密度が高い地方（山東省5名，河南省3名，安徽省2名，内モンゴル自治区，遼寧省，北京市，山西省，湖北省，重慶市，四川省，雲南省各1名）であるが，本稿では性別とともに，その違いは分析対象とはしない。さらに，第二言語（日本語）が母語（中国語）に与える影響は当然考えられるが（cf. 黄・玉岡2015），本稿では考慮しない。
[6] 本稿では，トランスクリプトの「全角」「半角」のことを考慮しない。

表２　「データ❷」の概要

データ番号	発話者記号		インタビューイーの属性		時間数
	インタビューアー	インタビューイー	職業	年齢（歳）	
❷-01	Ⓒ MIR01	Ⓒ MIE01	俳優・監督	47	0時30分05秒
❷-02		Ⓒ FIE02	俳優	34	0時36分18秒
❷-03		Ⓒ MIE03	俳優・監督	42	0時38分09秒
❷-04		Ⓒ MIE04	歌手	21	0時49分06秒
❷-05		Ⓒ FIE05	俳優・歌手	23	0時48分24秒
❷-06		Ⓒ FIE06	俳優（トークショー）	26	0時47分34秒

（*ⒸFIE　:中国語母語話者　女性　インタビューイー　(Chinese Female Interviewee)
ⒸMIE:中国語母語話者　男性　インタビューイー　(Chinese Male Interviewee)
ⒸMIR:中国語母語話者　男性　インタビューアー　(Chinese Male Interviewer)）

表３　データのトランスクリプト

，	[全角]ごく短いポーズ
ー／—	日本語の表記では，「ー」は音声を伸ばしていることを表している。中国語の表記では，「—」は音声を伸ばしていることを表している。いずれも音声の長さは最短でも1秒である。
《 s》	[半角]沈黙の秒数（1秒以上のポーズを沈黙とする。）
〈 〉	[半角]同時発話されたものは，重なった部分双方を〈 〉で括る。
（ ）	[半角]相手の発話の間，相手の発話と同時のあいづちなどを（ ）で括る。
＃	[半角]聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて，＃をつける。
‘ ’	[全角]①複数の読み方がある場合，その読み方を‘ ’に入れて示す。 ②日本語の読み方を‘ ’に入れてローマ字で示す。 ③漢字がない擬音語，擬態語などを，‘ ’に入れてピンインで示す。
“ ”	[全角]発話中に，話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合，その部分を“ ”で括る。
［↑］［↓］	[半角]感動詞類のイントネーション（上昇調，下降調）を表す。
？	[半角]疑問文につける。
〔 〕	その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように，笑い，あくび，咳，舌打ちなどをするときに，〔笑〕，〔咳〕，〔舌〕，〔あくび〕などと表記する。（中国語の場合は，〔笑〕，〔咳〕，〔舌〕，〔喝水声〕（水を飲む音），〔信息铃声〕（着信音），〔打哈欠〕（あくび）などと表記する。）
「 」	固有名詞等，発話者のプライバシーの保護のために明記できない人名，国家名，地域名などを表すときに用いる。また，各データでの出現順による通し番号を付ける（例えば，「国名1」，「人名2」，「地名1」など）。

（宇佐美まゆみ(2015:16-17)を参考に筆者作成（cf. 劉 2021a:24））

3.2. 研究方法

本稿では，中国語の自然会話・インタビュー会話に現れる舌打ち音は，単独で1ターンを構成する場合（「1ターン」）と1ターン内に現れる場合（「ターン初頭」「ターン中」「ターン末尾」）により，4つのパターンが想定できる[7]。本稿では，これらのパターンに現れる舌打ち音に着目し，その先行発話及び後続発話を観察する。また，舌打ち音，先行発話，後続発話の発話時に，これらがどのような連携を取りつつ，どのような認知プロセスを行っているかということを，認知的な観点から考察する。

4. 分析

本節では，データ❶，データ❷を対象とし，それらに現れる舌打ち音の意味・機能について，出現位置ごとに観察していく。

4.1. 1ターンの場合

まず，1ターンの舌打ち音のデータを見られたい[8]。(2)はインタビュー会話のデータである。

(2)

01ⒸMIR01：**我觉得我那会儿就是，大家都挺明确的想要去做一些有意义的事情，生活挺积极的你知道嘛，但是，我感觉，普遍大家都在说，现在的年轻人越来越丧了，越来越没有目标嘛，我不知道你是不是有这样一些，体会**

（私の周りですね，みんな明確な目標があって，有意義なことをやりたがっているよ，生活に積極的に生活しているよ，でもね，なんか，世間の人々は，現在の若者がやる気がないとか，目標がないとかってよく言ってるよね，あなたもそう思っているのかどうか分からないけど）

[7]「1ターン」とは，会話における発話権を持っている1人の発話者が話し始めてから話し終えるまでの発話のことである。なお，1人の発話者が話し始めてから，沈黙（1秒以上のポーズ）がある場合，発話者は発話権を一旦手放したとする。
[8]本稿では，発話ごとに「01ⒸMIR01」「02ⒸFIE06」のような発話番号を使用する。最初の2桁の数字は，抽出した発話の通し番号である。

02ⒸFIE06：〔舌〕，《1s》，我觉得其实大家，有目标
（〔舌〕，《1s》，実はみんな，目標があると思うよ）
03ⒸMIR01：嗯—
（うーん）

(2)では，02ⒸFIE06に1ターンの舌打ち音が現れている。ここでは舌打ち音の直後に1秒の沈黙が見られることから，発話者は発話権を一旦手放している。そのため，舌打ち音だけで1ターンが構成されていると判断する。

この場合，舌打ち音にはどのような意味・機能があるだろうか。舌打ち音の先行発話の命題（波線で示す）「你是不是有**这样**一些，体会」（あなたもそう（現在の若者がやる気がないとか，目標がないとか）思っているのかどうか）は,ⒸMIR01の質問である。後続発話の命題（下線で示す）「我**觉**得其**实**大家，有目**标**」（実はみんな，目標があると思う）は発話者ⒸFIE06の回答であり，ⒸMIR01の質問に否定の真偽判断を行っている。従って，舌打ち音の発話時に，発話者ⒸFIE06が先行発話の命題に対する真偽の検討を行っていると考えられる。

しかし，1ターンの場合，インタビュー会話には舌打ち音が見られる一方で，中国語自然会話には見られなかった[9]。

4.2. 1ターン内（ターン初頭）の場合

次に，1ターン内で，ターン初頭に現れる舌打ち音について考察する。(3)は自然会話のデータである。

(3)
01ⒸF05：你想考完N1**还**有一个月就可以回国了，7月7号到8月7号<**刚**好一个月>
（N1の試験が終わってから，1ヶ月後に帰国できるね，7月7日から8月7日まで，〈ちょうど1ヶ月〉）
02ⒸF06：<刚好一个月>，就<回国了>
（<ちょうど1ヶ月>，で<帰国するね>）
03ⒸF05：<〔舌〕>**对**
（<〔舌〕>そー）

(3)では，03ⒸF05のターン初頭に舌打ち音が現れている。ここでの舌打ち音の発話時では，発話者ⒸF05は，先行発話の命題「**刚**好一个月」（（7月7日から8月7日まで）ちょうど1ヶ月）に対する真偽の検討を行っている。そのうえで，「**对**」（そー）を用いて，その命題を肯定している。

次の(4)は，インタビュー会話のデータである。

(4)
01ⒸMIR01：所以毕业之前，你就已经做了这个打算
（卒業する前に，あなたはもうこの計画を決めたね）
02ⒸFIE05：〔舌〕其实我一开始的时候，我就想演戏
（〔舌〕実は私は最初の時から，演劇したかった）

(4)では，02ⒸFIE05のターン初頭に舌打ち音が現れている。ここでは，舌打ち音の先行発話の命題は「所以**毕业**之前，你就已**经**做了**这**个打算」（卒業する前に，あなたはもうこの計画を決めた）であり，発話者ⒸMIR01が発話者ⒸFIE05に確認する内容である。舌打ち音の後続発話の命題「其**实**我一**开**始的**时**候，我就想演**戏**」（実は私は最初の時から，演劇したかった）は，発話者ⒸFIE05の回答である。即ち，舌打ち音の発話時点で，発話者ⒸFIE05が先行発話の命題の真偽を検討している。

(3), (4)より，自然会話においても，インタビュー会話においても，ターン初頭に舌打ち音が見られる。

4.3. 1ターン内（ターン中）の場合

次に，ターン中に現れる舌打ち音ついて考察する。まず，(5)は自然会話のデータである。

(5)（(1)の再掲）
01ⒸF07：**但我觉得**「人名1」〔舌〕，**嗯**，性格不错
（「人名1」〔舌〕，うん，性格がいいと思うよ）
02ⒸF08：「人名1」？
（「人名1」?）

(5)では，01ⒸF07のターン中に舌打ち音が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者ⒸF07が「「人名1」」（「人名1」）という先行発話の命題の真偽を検討しているではなく，その命題内容に関連する情報（ここでは，「人名1」に対する人物評価）について真偽の検討を行っていると考えられるであろう。そのうえで，発話者ⒸF07が「**嗯**」（うん）によって，真偽判断の確定を行っている。また，後続発話の命題「性格不**错**」（性格がいい）は，発話者が「人名1」に対する人物評価である。

ここで(3),(4)と大きく異なる点は，舌打ち音の発話時に発話者が行っている真偽の検討の対象が，「先行発話の命題」ではなく，「命題内容に関連する情報」である

[9]現時点ではデータが少ないため，自然会話における「1ターン」の舌打ち音が見られなかったのであろうか。あるいは，舌打ち音はそもそも単独の1ターンとして発話しにくいのであろうか。この点は今後の課題とする。

ということである。

次の(6)は，インタビュー会話のデータである。

(6)

01©MIE03：**我，前两天，跟，俞白眉聊天的时候，我忽然，我忽然说了句，〔舌〕，我说我到40岁了，我才知道什么叫表演**

（私は，この前，**俞**白眉さんと話した時，私は突然，私は突然言った，〔舌〕，40歳になって，やっと演劇は何であるか分かったよって）

02©MIR01：**突然间这么，〔舌〕怎么讲，我从新西兰就有这个感觉（嗯），就是跟你聊天就觉得你一直很谦虚〔笑〕，然后有点惶恐〔笑〕**

（急にこんな，〔舌〕なんっていうか，ニュージーランドでこう思ったよ（うん），あなたと話す時に，あなたは非常に謙虚な人だと感じたよ〔笑〕，それでちょっと恐縮しているよ〔笑〕）

(6)では，01©MIE03のターン中に舌打ち音が現れている。舌打ち音の発話時に，発話者©MIE03が，先行発話の命題「我，前**两**天，跟，**俞**白眉聊天的**时**候，我忽然**说**了句」（私は，この前，**俞**白眉さんと話した時，私は突然言った）に関連する情報（ここでは，脳内の記憶）対して，真偽の検討を行うと考えられるであろう。後続発話の命題「我**说**我到40**岁**了，我才知道什么叫表演」（40歳になって，やっと演劇は何であるか分かった）は，発話者の記憶内容である。

また，02©MIR01にもターン中の舌打ち音が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者©MIR01が，先行発話の命題「突然**间这**么」（急にこんな）に関連する情報（ここでは，その場で感じたこと）に対する真偽の検討を行っていると考えられるであろう。

これらの場合も真偽検討の対象は「先行発話の命題に関連する情報」であるが，(6)の01©MIE03の舌打ち音は，(5)と類似した構造に現れている。即ち，いずれも従属節に現れている。ただし，出現位置は異なっていて，(5)は従属節内に，(6)では従属節の初頭にそれぞれ出現している。

一方，(6)の02©MIR01の場合は，上記とは異なり，先行発話に指示詞が含まれている。そして，これらの指示詞の指示対象に対して真偽の検討が行われているようである。ただし，01©MIE03の場合のように舌打ち音の直後ではないが，少し後ろに「就是跟你聊天就**觉**得你一直很**谦**虚」（あなたと話す時に，あなたは非常に謙虚な人だと感じたよ）という従属節が見られる。このことから，この舌打ち音も，(5)や(6)の01©MIE03の場合と同じように扱った方が良いのかもしれない。

(5)，(6)から，自然会話においても，インタビュー会話においても，ターン中に舌打ち音が見られる。

4.4. 1ターン内（ターン末尾）の場合

次に，ターン末尾に現れる舌打ち音について考察する。まず，(7)は自然会話のデータである。

(7)

01©F03：**带着批判的眼光**

（批判的な目でね）

02©F04：**对〔舌〕**

（そー〔舌〕）

(7)では，02©F04のターン末尾に舌打ち音が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者©F04が，「**带**着批判的眼光」（批判的な目で）という命題の真偽を検討している。

次の(8)はインタビュー会話のデータである。

(8)

01©MIE03：**就是，就是很焦虑**

（なんか，胸を痛めているね）

02©MIR01：是

（はい）

03©MIE03：**很焦虑，嗯，这也是我们〔舌〕《2s》，反正就是，这就是我们这几面年最想说的话，然后我们让它更多的放在电影里**

（胸を痛めているね，うん，これも私たちが〔舌〕《2s》，とにかくこれは私たちがこの何年間に一番言いたいことだ，そして私たちはこれを映画で表現するよ）

(8)では，03©MIE03のターン末尾に舌打ち音が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者©MIE03が，「**这也是我们**」（これも私たちは）という命題に関連する情報（ここでは，脳内の記憶）に対して，真偽の検討を行っている。後続発話の命題「**反正就是，这就是我们这几面年最想说的话**」（とにかくこれは私たちがこの何年間に一番言いたいことだ）は，発話者の記憶内容である。

ここでも，(6)と同様に，先行発話に指示詞が含まれている。上述の「脳内の記憶」とは，この指示詞の指示対象であると考えられるのではなかろうか。

(7)，(8)から分かるように，自然会話においても，インタビュー会話においても，ターン末尾に舌打ち音が見

られる。

以上より，舌打ち音は，①自然会話においては，1ターン内のターン初頭，ターン中，ターン末尾に現れているが，単独で1ターンとなる場合は見られなかった，②インタビュー会話においては，いずれの場合にも現れている，③自然会話にしても，インタビュー会話にしても，舌打ち音の発話時に「真偽の検討」という認知プロセスをモニターする，④舌打ち音の発話時に，先行発話を参照し，その命題内容に対する真偽の検討を行うことだけではなく，その命題内容に関連する情報を対象とする場合もある，ということが判明した。

5. 比較検討

5.1. データの種類による比較

4節における分析から，自然会話とインタビュー会話における舌打ち音の意味・機能にあまり違いはないことが判明した。データ不足はあるものの，おそらく4種類のいずれの位置であっても，舌打ち音は出現し，しかも同じ意味・機能を持っているのであろう。

5.2. 群に関する感動詞類との比較

次に問題となることは，舌打ち音が感動詞類と同じ意味・機能を持っているかどうかという点である。劉(2020a, 2021a, 2021b)は，中国語自然会話における二連鎖感動詞類を構成する感動詞類には，以下のように大きく4種類の認知プロセスが見られると提案している。

(9)①「A群」(「啊」(あ)，「哦」(あ)，「欸」(えっ) など)：発話時に，発話者が先行発話を参照し，その命題内容に対するアクセスを行う。

②「B群」(「哦―」(あー)，「啊―」(あー)，「嗯―」(うーん) など)：発話時に，発話者が先行発話を参照し，その命題内容に対する真偽の検討を行う。

③「C群」(「也对」(まー)，「也是」(まー)，「也行」(まー) など)：発話時に，発話者が先行発話を参照し，その命題内容に対する真偽判断の保留を行う。

④「D群」(「对」(そー)，「嗯」(うん)，「嗯――[↑↓]」(うんーー[↑↓])，「啊―[↓]」(あー[↓])，「是」(そー) など)：発話時に，発話者が先行発話を参照し，その命題内容に対する真偽判断の確定を行う。

4節での分析結果を(9)の分類に当てはめると，舌打ち音はほぼB群に含まれると考えて良いようである。即ち，「哦―」(あー) などと同様に，舌打ち音は感動詞類の1つとして扱うことができることになる。

ただ，B群の感動詞類と異なる点は，B群が単独で1ターンを構成することが頻繁にあること，そして(12),(13)のように形態的に長音化した形で表れやすいことである。

(10)（(2)の一部）
03ⒸMIR01：嗯―
（うーん）

(11)（cf. 劉2021a:78）
0089ⒸF07：嗯―
（うーん）

それに対して，舌打ち音は単独で1ターンとなり難く，また形態上も長音化することは難しい。

また，もう1つの問題として，(9)のB群とは異なる性質を持つ場合がある，ということがある。それは，真偽検討の対象が，先行発話の命題だけではなく，先行発話の命に関連する情報にまで及び得ることである（cf. (5),(6),(8)）。これらの中で，(6) の02ⒸMIR01,(8)は先行発話に指示詞が現れており，その指示詞の指示対象が舌打ち音の真偽検討の対象となっていると観察できる。従って，舌打ち音は，B群に属する感動詞類と共通する性質を持つ一方で，B群とは異なる性質を持っていると言えるかもしれない。ただし，B群の感動詞類が，指示詞の指示対象にまで真偽検討の対象を拡大できるかどうかは，あらためてデータを観察してみる必要があるだろう。また，(5),(6)については，主節・従属節の問題が絡むかもしれないが，データ不足のため，議論は保留にする（6節参照）。

5.3. 認知ユニットにおける感動詞類との比較

舌打ち音が感動詞類であるかどうかを検証するためには，もう1点，問題が残る。それは，感動詞類であれば，他の感動詞類と連鎖して，「認知ユニット」を構成する可能性があるが，舌打ち音はその構成素となり得るかどうかという問題である。

劉・有元（出版予定），劉(2021a)を初めとする一連の研究では，二連鎖感動詞類は単純に2つの感動詞類が並んでいるわけではなく，「アクセス（A群）→真偽の検討（B群）→真偽判断の保留（C群）→真偽判断の確定（D群）」という一連の順序付けられた認知プロセスがあるという仮説を立てている。そして，このような一連の認知プロセスの集合体を「認知ユニット」と捉え，様々な認知ユニットの中の1つとして，(12)のよう

な「真偽判断に関する認知ユニット」（記号【　】で括って示す）があると仮定している。

(12)真偽判断に関する認知ユニット：
【アクセス（A群）→真偽の検討（B群）→真偽判断の保留（C群）→真偽判断の確定（D群）】

舌打ち音が(12)の構成素になるのであれば，それが感動詞類であることの証拠の1つになるが，それを検証するためには，感動詞類と連続して現れるデータを観察する必要がある。

まず，(13)のデータを見られたい。

(13)
01ⒸF06：**「大学名3的简称」，确实以前录取分数线〔舌〕比，我们那时候，比我们，比「大学名2的简称」好**
（「大学名3の略称」，昔の最低合格点が確かに〔舌〕，私たちの入学時期より，私たちより，「大学名2の略称」より，高かった）
02ⒸF05：**嗯ー，〔舌〕**，<那你>
（うーん，〔舌〕，<君が>）
03ⒸF06：<那看>**你什么专业了这个东西**
（<でもね>これも学部によるでしょう）

(13)では，02ⒸF05に「**嗯**—，〔舌〕」（うーん，〔舌〕）が現れている（二重線で示す）。「**嗯**—」（うーん）及び舌打ち音はいずれも先行発話の命題に対して真偽の検討を行っている。つまり，「**嗯**—，〔舌〕」（うーん，〔舌〕）は，【真偽の検討（B群）→真偽の検討（B群）】という認知プロセスの流れをモニターする発話であると考えられる。

次の(14)は，感動詞類の直前に舌打ち音が来ている場合である。

(14)
01ⒸM17：**时间都耽误了**
（時間も無駄にしてしまった）
02ⒸM16：**〔舌〕**，<也行>
（〔舌〕，<まー>）

(14)では，02ⒸM16に「〔舌〕，也行」（〔舌〕，まー）が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者ⒸM16が先行発話の命題に対して真偽の検討を行っている。そのうえで，発話者ⒸM16が「也行」（まー）という発話によって，その命題の真偽判断の保留を行っている。つまり，「〔舌〕，也行」（〔舌〕，まー）は，【真偽の検討（B群）→真偽判断の保留（C群）】という認知プロセスの流れをモニターする発話である。舌打ち音がB群であると仮定すると，(12)の認知ユニットにおける認知プロセスの順序とも合致していることになる。

(15)も，(14)と同様，舌打ち音の直後に感動詞類が来ているデータである。

(15)（(3)の再掲）
01ⒸF05：**你想考完N1还有一个月就可以回国了，7月7号到8月7号**<**刚好一个月**>
（N1の試験が終わってから，1ヶ月後に帰国できるね，7月7日から8月7日まで，〈ちょうど1ヶ月〉）
02ⒸF06：<**刚好一个月**>，**就**<**回国了**>
（<ちょうど1ヶ月>，で<帰国するね>）
03ⒸF05：<**〔舌〕**>**对**
（<〔舌〕>そー）

(15)では，03ⒸF05に「〔舌〕**对**」（〔舌〕そー）が現れている。ここでは，舌打ち音の発話時点で，発話者ⒸF05が先行発話の命題に対して真偽の検討を行っている。そのうえで，発話者ⒸF05が「**对**」（そー）という発話によって，その命題の真偽判断の確定を行っている。従って，「〔舌〕**对**」（〔舌〕そー）は，【真偽の検討（B群）→真偽判断の確定（D群）】という認知プロセスの流れをモニターする発話である。この場合にも，(12)の認知プロセスの順序に従っている。

5.4. リセット感動詞類との共起

感動詞類の中には，認知ユニットには属さず，認知プロセスを終了させる機能を持つ「リセット感動詞類」があることが仮定されている（cf. 劉2021aなど）。例えば，感動詞類が連続する場合，次のようなデータが見られる。

(16)（cf. 劉2021a:91）
0309ⒸF11：**嗯，更集中精力，就更能稳下来，太大的话太空旷了，我觉得**
（うん，精力を集中し，落ち着くね，広すぎるとなんか）
0310ⒸF12：**嗯ー［↓］，你们专业人多呀**
（うんー［↓］，あなたたちの専攻の人が多いね）
0311ⒸF11：**嗯，哎呀**
（うん，あーあ）

(16)では，0311ⒸF11に「**嗯，哎呀**」（うん，あーあ）が現れている。前項の「**嗯**」（うん）はD群に属する。D群は真偽判断に関する認知ユニットの終了を標示

することから，「**哎呀**」（あーあ）は**【嗯】**（うん）の認知ユニットには含まれないと考えられる。「**哎呀**」（あーあ）によって発話者ⒸF11の発話が終わっていることから，これは，次の発話者が新たな認知ユニットを始めるためのリセットの機能があると仮定できる（cf. 劉・有元（出版予定），劉(2021a)）。

このリセット感動詞類が舌打ち音と共起する場合が見られる。(17)は，リセット感動詞類の直前に舌打ち音が現れる場合である。

(17)
01ⒸF05：**将近两个月**
（ほぼ2か月ね）
02ⒸF06：**不，两个多月一点点，多，几天**〔笑〕
（いや，2ヶ月ちょっとぐらい，オーバーしているね，何日ぐらい〔笑〕）
03ⒸF05：多6天哈
（6日間だよね）
04ⒸF06：**嗯，《3s》〔舌〕哎呀，**<**好累呀**>
（うん，《3s》〔舌〕あーあ，<疲れたわ>）

(17)では，04ⒸF06に「〔舌〕**哎呀**」（〔舌〕あーあ）という発話が現れている。ここでは，舌打ち音は真偽の検討を行っている。後項の「**哎呀**」（あーあ）は真偽判断の認知ユニットを終了させるリセット感動詞類であり，【真偽の検討】の認知ユニットには含まれないと考えられる。即ち，04ⒸF06の発話は，「【真偽の検討（B群）】，リセット感動詞類」という順序で現れていることになる。リセット感動詞類は，認知ユニットを終了（リセット）させるものであるため，当然認知ユニットの直後に現れることになるが，ここでもその順序通りである。

6. まとめ

本稿では，中国語の自然会話・インタビュー会話を対象とし，舌打ち音の機能について考察した。その結果，以下のことが明らかになった。

①中国語の舌打ち音は，自然会話においても，インタビュー会話においても現れており，特に，インタビュー会話のインタビューイー・インタビューアーの両方の発話に現れているため，中国語母語話者の舌打ち音は会話では広く使用されている。
②舌打ち音は，感動詞類（B群）と同様に，その発話時に「真偽の検討」という認知プロセスが流れている。
③舌打ち音が感動詞類（B群）と異なるのは，単独で1ターンとして現れにくい点である。また，感動詞類（B群）は長音化しているが，舌打ち音はできないという点も異なっている。

特に②においては，認知プロセスや認知ユニットといった概念や考え方が舌打ち音にも適用できることが判明した。従って，舌打ち音は基本的には感動詞類に属すると言えるだろう。

しかし，感動詞類とは異なる性質も観察された。舌打ち音では，先行発話に指示詞が含まれているとき，真偽検討の対象が，その指示詞の指示対象にまで及ぶ場合がある。

この特徴を説明するためには，様々な記述方法が考えられる。１つには，(9)のB群の定義はそのままにして，「真偽判断に関する認知ユニット」とは別の認知ユニットを仮定するという方法がある。ただし，いずれも真偽判断という認知プロセスである点で，いずれは統合を試みることになるかもしれない。

また一方で，(9)のB群の定義を変更するという方法である。この場合，例えば次のように記述することができるであろう。

(19)「B群」：発話時に，発話者が先行発話を参照し，その命題内容，あるいは，それに関連する情報に対する真偽の検討を行う。

ただし，この場合，「関連する情報」がどの範囲までを含むかを明確に規定する必要がある。

以上のような考え方は，舌打ち音があくまで感動詞類であることを前提としたものである。舌打ち音が感動詞類ではないという考え方，あるいは感動詞類と一部性質が重なっているという考え方，はたまた有元(2018)で示した「聞き手の注意を喚起するブザー」であるという考え方など，他の可能性も検討すべきであろう。特に，有元(2018)で扱った日本語の出雲方言の「け（ー）」はその分布に統語的な制約を受けることから，舌打ち音の分布と類似している。舌打ち音がB群であるとするならば，B群は主節・従属節に関わる分布上の制約を持っていることになる。B群とみなすかどうかという問題には，さらに慎重な検討が求められるであろう。

7. 問題点・今後の課題

本稿では，舌打ち音の性質について試行的な記述を行ったに過ぎない。以下のような問題点や今後の課題が残っている。

まず，今回考察したデータは十分な量とは言えない。一方，量だけではなく，発話者の地域，年齢，性別などの属性の影響も留意すべきである。今後，様々な角度か

らデータの量を増やすべきである。

また，舌打ち音についての分析は，未だ十分とは言えない。舌打ち音は，音声的には生理的な音に聞こえる。そのため，物理的に聞きづらくなることがあり，その点で典型的な感動詞とは異なっている。舌打ち音がどの程度語彙化され，文法的な役割を担っているかは言語による違いもあると予測される。十分な検討が必要である。特に，本稿の結論は劉(2021c)とは大きく異なったものとなっている。その理由がデータの種類によるものなのか，それとも分析方法によるものなのか，慎重に吟味する必要があるだろう。

さらに，会話では，舌打ち音だけではなく，笑い，咳払い，空気すすりなどの非言語音が現れる場合もある。これらの発話時にも，認知的な流れがあるかもしれない。この考え方を拡大していくと，会話全体に何らかの認知プロセスが流れていることが想定できるだろう。ただ，どのような認知プロセスが流れているのかについて解明することは，現時点では非常に難しいと考える。なぜなら，認知プロセスを浮き彫りにする手段として，何を観察すればよいのかが不明であるからである。認知プロセスの考え方がどこまで汎用性があるか，今後の課題である。

今後は，さらに多くの言語データを収集し，詳細な考察をすることによって，舌打ち音，非言語音，感動詞類，認知プロセスなどの問題を検討していく必要がある。

参考文献

＜日本語文献＞

有元光彦（2018）「出雲方言における感動詞類「け（ー）」について」『感性の方言学』，pp.273-294，ひつじ書房.

有元光彦（2020）「感動詞の体系」『第110回日本方言研究会研究発表会発表原稿集』，日本方言研究会，pp.53-58.

于康（2007）「中国語母語話者の「舌打ち」のコミュニケーション機能について」『Ex：エクス：言語文化論集』5，pp.109-134，関西学院大学.

金水敏（2017）「役割語における感動詞」「感動詞ワークショップ」発表配布資料，於県立広島大学，2017年12月16日.

黄郁蕾・玉岡賀津雄（2015）「中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因」『言語文化と日本語教育』（48・49），pp.11-21，お茶の水女子大学日本言語文化学研究会.

小林隆（2020）「感動詞の分布と歴史」『第110回日本方言研究会研究発表会発表原稿集』，日本方言研究会，pp.65-70.

H．サックス・E．A.シェグロフ・G．ジェファソン（2010）『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織』西阪仰（訳），世界思想社.

定延利之（2000）『認知言語論』，大修館書店.

定延利之（2010）「会話においてフィラーを発するということ」『音声研究』14（3），pp.27-39，日本音声学会.

定延利之（2015）「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」友定賢治（編）（2015），pp.3-14，ひつじ書房.

田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3，pp.59-74，日本認知科学会.

友定賢治（編）（2015）『感動詞の言語学』，ひつじ書房.

友定賢治・于康・定延利之(2008)「「舌打ち」の日中対照研究に向けて」『中日非語言交際研究』pp.200-214，外語教学与研究出版社.

萩原孝恵・池谷清美（2020）「タイ人の舌打ち：マルチモーダルインタラクションにおけるその意」『山梨国際研究 山梨県立大学国際政策学部紀要』15，pp.75-86.

フェルディナン・ド・ソシュール（2016）『新訳ソシュール一般言語学講義』町田健（訳），研究社.

森田美里（2015）「フランス人には聞こえない舌打ち音：日仏対照言語学的観点から」『フランス語フランス文学研究』106，pp.159-174.

森田美里（2019）「フランス語話し言葉における舌打ち音の諸相―音声学的，通時言語学的，地理的観点から―」『関西フランス語フランス文学』25，pp.91-92.

森田美里（2021）『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』，くろしお出版.

劉伝霞（2020a）「中国語談話における二連鎖感動詞類について」『東アジア研究』18，pp.133-149，山口大学大学院東アジア研究科.

劉伝霞（2020b）「BTSJコーパスにおける二連鎖感動詞類について」『Journal of East Asian Identities』5，pp.1-10，山口大学・淡江大学.

劉伝霞（2021a）『自然会話における二連鎖感動詞類に関する研究』博士論文，山口大学大学院東アジア研究科.
http://www.lib.yamaguchi-.ac.jp/yunoca/handle/DT13100143

劉伝霞（2021b）「自然会話における二連鎖感動詞類について」「感動詞研究会」発表配布資料，オンライン，2021年6月6日.

劉伝霞・有元光彦（出版予定）「日本語会話の二連鎖感動詞類に関する予備的考察」友定賢治（編）『感動詞研究の展開』，ひつじ書房.

＜中国語文献＞

李成军（2005）**《现代汉语感叹句研究》博士論文，武汉大学.**

李丛禾（2007）**〈感叹词的认知理据和语用功能探究〉外语学刊**No.3，pp.118-122，**黑龙江大学.**

劉傳霞（2021c）「關於漢語自然會話中嘖舌現象的探究」『Journal of East Asian Identities』6，pp.55-63，山口大学・淡江大学.

束定芳（2013）〈**认知语言学研究方法、研究现状、目标与内容**〉**西华大学学报**No.3，pp.52-56.

严辰松（2000）**〈语言理据探究〉解放军外国语学院学报**No.6，pp.1-6.

赵元任（1979）**《汉语口语语法》商务印书馆.**

钟紫琦（2018）**〈话语标记语“啧啧啧”语用功能探析〉**文教資料No.22，pp.16-18，**南京师范大学.**